こひつじ幼稚園　園便り

№7　2025.9.26

子どもが大切にされるということ

私は子どもの「ふとした顔」を見るのが好きです。名前などを間違えると、他の子がニヤーとした顔をした後、正しい名前を言い直してくれたりします。作り物をするのにうっかりして、「ハサミがなかったなー」とつぶやくと、小さな独り言なのにすごいスピードでハサミを取りに行って「ぼくのを使って下さい」など、強い瞳のまじめな顔で言ってくれます。ふとした時、ふとした子どもの横顔は、その子がもっている心の中の一端を覗いたような気持ちになってわくわくします。

大正から昭和にかけて、日本に幼児教育の改革を起こした、児童心理学者、教育者である倉橋惣三は、ある本の中で、**「その人の味はうっかりしている時に出る。うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。（略）うっかりという言葉、うっかりする動作、出あい頭に、うっかりと見せる顔。その時に出る我々のもち味こそ・・・うっかりしている時の全くないのも、つくろい過ぎよう。そこでこそ、幼児教育は難しいものと昔も今も言われるのである。」**

と、書いてあります。だからと言ってわざと間違えるのは論外ですが、間違えてはいけないという幼児教育は間違いです。こひつじ幼稚園では「うっかり」を「ふとした」と書き換えます。是非書き換えて読んでみてください。

運動会の前日の帰りの時間のことです。

わくわくの組の子どもたちは、椅子に座ってまゆ先生の話を聞いています。「明日の運動会は強い足で頑張ろうね」と先生がいうと「がんばる」と手をぐーにしてエイエイオーと、それぞれの子どもたちが叫び出していました。一人の子が自分の足をまじめな顔でトントンしていました。自分の足になんていったのだろうと思いました。先生に一人ひとり頭をなでてもらって、明日に思いをもって玄関に向かいました。

つぼみ組の子どもたちもきれいに並べた椅子に座って、ももか先生の話を聞いていました。ももか先生が「明日は、マッチョの足で頑張ろう」と話しかけ、一人ひとりの足を丁寧に触って、一人ひとりに「すごいマッチョだね」と伝えていました。自分の番が来るまで緊張している子がいました。自分の番がきて先生に触られてマッチョだねと言われ、「やっぱり・・」と、つぶやいた時、私と目が合いました。自信に満ちた目でした。ふとした顔を見落とさなくてよかったと思いました。

たんぽぽ組では、自分の椅子から離れて、星奈先

生の周りに集まって、どの子も真剣な顔をしていました。学級に入ってみると、星奈先生が大冒険の物語の素話をしていました。先生の肩や足にもたれかかっている子、直立不動で聴き入っている子など様々でしたが、分かったことは冒険をどっぷり楽しんできた子どもたちが、こうして想像を掻き立てられ、ファンタジーを楽しんできたそのままが、運動遊びの会に繋がっているのだということでした。お話の最後は、冒険はお菓子の国に辿り着いたという結末に「はぁー」と息を吐き出し、「よかった」、「いいねぇ」、「怪獣が出てこなかったね」、と言いながら、自分の並べた椅子にそれぞれが戻っていきました。真剣な瞳で星奈先生を見ていた子の瞳がほっとした目に代わりました。ファンタジーの世界から、現実に戻った瞬間に立ち会ったような気持ちになりました。そして、運動遊びの会が楽しみになりました。

ゆり組では、最後の運動会を自分たちらしく生きるための相談をしていました。リレーが子どもたちの気がかりのようでした。現実を生きるゆり組の子どもたちの思いを、まり子先生はじっくり丁寧に聞いていました。

玄関で子どもが言いました「明日の運動会楽しみだね。栄先生のことも応援しているからね」と。私のふとした顔はどんなだったのでしょう。

運動会前日の学級の様子をお知らせしましたが、一人ひとり自分の個性を発揮していく子どもたちとどの学年の教師も、丁寧にかかわり、触れあいながら、子どもが大切にされていることを嬉しく思いました。素晴らしい運動会になると、確信しました。

子どもの顔つき、後ろ姿、指のしぐさ・・子どもは一人の人間として持ち味を生かしながらのびのびと生きています。私たち大人も、同じようにふとした姿を子どもたちに見られているのだということを忘れてはなりません。

倉橋惣三の言う通り、幼児教育は大変難しいのですが、一人ひとりの子どもの持ち味を大切に活かし育てる、丁寧に愛情深く育てるならば、そこに実るものを見る時ほど嬉しく幸せなことはないのです。

運動会では、たくさんの愛の応援、またご感想をありがとうございました。